

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「二月は逃げる」

「一月は往く（居ぬ）、二月は逃げる、三月は去る」ともいわれるように、まさに光陰矢の如し。特に二月は逃げるどころか、まるで駆け足で過ぎ去っていくように思われます。とりわけ寒さ厳しい北国では、春を待ちわびる意味でもさっさと逃げていった欲しい月かも知れません。

また、昔から「にっぱち」（二八）という言葉があり、極寒の二月と猛暑の八月は品物が売れない時期とされ、業種や時期にもよるでしょうが、多くの業界では景気が悪い時節とされています。特に年末年始で散在したあとの二月は、買い控えの傾向がありますから業界にとってあまり好まれていないようです。

新潟県内の海岸部では、「二八（にっぱち）船頭恨み月」、「二八 荒衛門（荒右衛門）」という言葉が古来みられ、時化の二月と台風の八月は海が荒れるためこの時期を忌み嫌ったようです。

それにしても、「二月は逃げる」といい、「二八」「二八荒衛門」といい、昔の人は語呂合わせでうまい表現をしたものだと感心します。

この語呂合わせは、数え唄やわらべ歌にもみられますが、なんといっても県内で語呂合わせの代表格は、岩室甚句（新潟市西蒲区 旧岩室村）の中に出てくる数え唄でしょう。

「一にいちじく、二に人参、三に三度豆、四にしいたけ、五に ごぼう、六に むくろじゅ（むかごの説も）、七に 南蛮、八に 白菜（八珍柿の説も）、九に 黒豆、十に とうがん ホイ」

全国的にも似た数え唄があるとはいえ、しっかりと三度豆（絹サヤ）と地元の呼び名（野菜方言）を使い、ご当地の名物を盛り込んであるのもおもしろいと思います。

そこで、当「おもしろにいがた学」オリジナル数え唄を特別につくってみましたのでどうぞ御唱和くださいませ。

それでは参ります。

「一に いちがいこき（頑固者）、二に 新潟の煮菜（漬菜を煮た郷土料理）、三に さんじょっぱらい（後をかまわず、やりっぱなしにすること）、

四に しじゃらほじゃら（さんじょっぱらいとほぼ同義語）、五に ごうやく（腹だたいいこと、いらいらすること）、六に ろくさ（物事や人がよろしくないこと、またはその状態）、七に なじらね（新潟版の日常あいさつ）、八に はつめ（器用なこと、器用な人）、九に 口もじらんね（食べ物等がしょっぱ過ぎること）、十で とうとう、とんとき（粗忽者、その状態）とびすけ（騒がしい人またはおてんば）、どう

しょば、どうしょば、二月は逃げるではい、おしまい」

では、お後がよろしいようで。寒い二月ニコニコ元気に過ぎましょ。

